

電信協約

一九〇八年一月一二日

明治四一年一月一二日

下名ハ巴里市州芝罘間ノ海底電信線及之歐洲日本電信線ノ案件ヲ相互和協ノ
精神ヲ以テ妥協スル爲日本國政府及清國政府ヨリ正式ノ委任ヲ受ケ左ノ諸
條ヲ協定ス

第一條 日清兩國政府ハ巴里市州ヨリ芝罘トノ間ニ海底電信線ヲ敷設ス

ヘシ日本國ハ右海底電信線ノ巴里市州ヨリ芝罘ヲ距ル七哩半迄ノ部分ヲ
敷設維持シ清國ハ前記海底電信線ノ中芝罘ヨリ芝罘ヲ距ル七哩半迄ノ部
分ヲ敷設維持シ右ノ點ニ於テ海底電信線ノ兩部分ヲ連絡スヘシ右電信線
ノ巴里市州端ハ日本國直ラ之ヲ運用シ芝罘端ハ清國專ラ之ヲ運用スヘシ
然レ日本國特殊ノ必要ニ應セムカ爲無執着日中充分ナル時間ヲ協定シ其ノ
間在芝罘日本國領局ト右海底電信線トヲ直接連絡セシメ日本國領局ハ芝

果發着ノ日本國官報芝罘條約ノ假名私報ヲ前記電信線ニ由リ日本電信
 局ノ直轄スル地方、往復スルノ權利ヲ有スヘシ日本國ハ右ノ通信ニ對
 シテ追テ協定スハキ一定ノ首尾料ヲ清國芝罘電信局及在芝罘日本郵政
 局間ノ連絡線ハ清國ニ於テ之ヲ架設維持スヘシ日本國ハ出來得ル限り
 清國自餘ノ地方往復ノ通信、芝罘ニ於テ轉送セラルルヲ防遏スルコ
 チ約、日本國ハ又將來ノ豫メル最惠國待遇ノ保留ノ下ニ其ノ郵政
 清國政府ノ承諾ヲ得ルニ其ノ租借地又ハ鐵道附屬地外ノ清國ニ於テ
 海底電信線ヲ敷設スルハ其ノ電信電話線ヲ架設シ若ハ一切ノ無線通信
 ノ設備ヲ爲ササルニ其ノ所ハ芝罘間青州間海底電信線ノ首尾料及中繼
 料ハ膠州一切ノ通信ニ對シテ協約ヲ以テ之ヲ妥當スヘシ
 第二條 日本國ハ五萬圓ノ支拂ニ對シ滿洲ニ於テ鐵道附屬地外ニ在ル一
 切ノ日本電信線ヲ直ニ清國ニ引渡スヘシ日本國ハ滿洲ニ於テ鐵道附屬
 地外ニ在ル日本電話事業ニ關シ一ノ協定ヲ成立セシムルノ目的ヲ以テ
 何時ニテモ清國與交渉ヲ開始セムトス右協定條約ニ至ル迄日本國ハ豫

* 清口政府ノ承諾ヲ得スシテ滿洲ニ於ケル其ノ現在ノ電話系ヲ擴張シ
 又ハ清口電信線ト競争シテ其ノ電話線ヲ電報送受ノ用ニ供セサルヘシ
 第三條 清口政府ハ日本鐵道附屬地ニ近接セル滿洲ノ開市場若ハ條約港
 如安東、牛莊、遼陽、奉天、錦州及長春ニ於テ十五箇年間前記開市場
 若ハ條約港ヨリ該鐵道附屬地ニ達スル一線若ハ二線ノ特別電信線ヲ日
 本政府電信事業ノ專用ニ供スルコトヲ承諾ス該電信線ハ鐵道附屬地
 ニ到ル迄清口政府ニ於テ善良ノ狀態ニ維持スヘキモノトス
 第四條 第三條記載ノ特別電信線ハ清口電信局内ニ於テ日本政府ノ任
 用スル日本取扱員之ヲ取扱、之カ爲清口政府ハ毎箇會計年度七百弗ノ
 賃料ヲ以テ該取扱員ノ特別事務所及設備ヲ供給スヘシ但シ右設備中ニハ取
 扱員ノ居宅ヲ含マサルモノト知ルヘシ
 第五條 第三條記載ノ特別電信線ハ日本電信系ノ直接スル内ニ發着スル
 電報ノ交換ニ限り信用セラルヘキモノトス
 第六條 第三條記載ノ開市場若ハ條約港ニ於テ日本電信局ハ清口電信局

内ニ受付事務室チ有スハタ其ノ通信配達ハ特殊ノ制限ヲ著セサル配
達夫之ヲ行フモノトス

第七條 日本國政府ハ在滿洲日本電信線ニ由リ送受スル一切ノ通信ニ

對シ親政令トシテ毎三千圓ヲ清國政府ニ支拂フヘシ

第八條 本協約ハ關係兩國政府ノ承認ヲ經タル上芝罘青島州間海底電
信線及在滿洲日本電信線ニ關スル協約ノ細目詳定セラルルヲ待テ之
ヲ實施ス

右證據トシテ下名ハ本協定ニ記名調印スルモノナリ

千九百八年十月十二日東京ニ於テ英文ニ簽手作ル

外務次官 石井 菊次郎

外務省政務局長 倉 知 鐵 吉

電政局長 周 萬 鵬

以該東洋海上停泊者本日即チ千九百八年十月十二日締結ノ日清電信協約
ニ關シ下名等ハ左ノ口約ヲ茲ニ確認致候

大孤山陸陽日本國海底電信線ハ成ルヘク速ニ同所ヨリ撤去セラルヘキ
モ今後數月間ハ事情之ヲ待ササルヘキヲ以テ清國政府ハ本日ヨリ二十
箇月以内ノ期間大連佐世保海底電信線ニ故障アルトキハ其ノ停陸中安
宜大孤山電信線ヲ日本電信部ノ使用ニ供スヘキモノト知ル可シ
此段申進候 敬具

千九百八年十月十二日

東京ニ於テ

エフ・エヌ・ドレージック

周 萬 鵬

外務省

石井 菊次郎 殿
倉知 鐵吉 殿

文書ノ出所並ニ成立ニ關スル證明書

(二五)

自分、林壽ハ外務省文書課長ノ職ニ居ル者ナル處、茲ニ添付セラレタル日本語ニ依ツテ書カレ五頁ヨリ成ル電信協約ト題スル書類ハ日本政府ハ外務省文書課ノ保管ニ係ル公文書ノ正確ニシテ眞實ナル寫シナルコトヲ證明ス

昭和二十二年二月十二日

於東京

林

壽

右署名捺印ハ自分ノ面前ニ於テ爲サレタリ

同日 於同所

立會人

浦

部

總

局